



吉田家住宅

桐生織物発祥の地とされる川内町、多くの機屋が軒を連ねた“織物の里”である。日本初の輸出織物である「羽二重」は明治10年代に桐生の買継商小野里喜左衛門が川内の桑原佐吉織物工場に依頼して開発したとされる。歴史的な羽二重創織の桑佐織物工場から程近い川内町五丁目、山田川源流の清冽な流れに沿って、江戸時代から16代にわたって連綿と続く旧家・吉田家がある。

山田川の両岸に堅古な石垣を積み、板塀を巡らせた山あいの敷地内に主屋と三つの蔵、二階建の作業場（蚕室と水車小屋）が建てられている。県道駒形 大間々線から山田川に架かる土橋を渡ると、左手に最初の蔵が米蔵、続いて味噌蔵、正面には二階建ての巨大な主屋。主屋は明治20年から30年代に建てられたといい、玄関右手が主の居室、左手が工場と寄宿舍（二階）として使われた。主屋の裏手には家蔵もある。三代前の喜三郎氏の時代に織物業が飛躍発展、満韓支向けのジョーゼットを製織し、活況を呈した。

大正6年の「桐生大手織物業者名簿」に喜三郎氏の名があり、当時、手織機10台で女子従業員10人が輸出向けの織物を生産したという記録がある。最繁期の昭和初期には40人から50人の従業員がいたという。県道を挟んだ向かいの敷地にはノコギリ屋根工場があり、戦時中は解体して供出したが、戦後に古材を使って再建、織物業は昭和30年代まで続けた。現在の当主は吉田和子氏、父親は県議会議員を務めた吉田清之介氏である。

市街地から離れた自然の中での生産活動が当時の織物の隆盛を支えた。この地域に多く存在した機屋の数は減ったが、吉田家住宅は自然と一体となった工場形態を今に伝えている。

所在地 桐生市川内町5 - 2588
所有者 吉田 和子